

保育現場における「幼児期運動指針」の認知度と運動実施状況の実際

城戸 佐智子

要約

文部科学省は、2012年に「運動習慣の基盤づくりを通して、幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動網力の基礎を培うとともに、様々な活動への意欲や社会性、創造性などを育むことを目指す」として、「幼児期運動指針」を策定し、全国すべての約35,000の保育所・幼稚園に通達した。しかし、2014年の群馬県総合教育センター幼児教育センターの報告によると、群馬県内の全ての保育施設の3歳以上児クラスの担任対象に「幼児期運動指針」についての質問紙調査を行ったところ、75%の保育者が存在認知をしているが、25%の保育者は全く認知していないという結果が示された。また、「幼児期運動指針」を意識した保育を行っている園は3割程度であることが示された。そこで、本研究では、幼児の運動能力向上を目指し、宮崎県の教育・保育施設における「幼児期運動指針」の認知度及び幼児の運動能力向上に対する取り組みの実態把握と意識について明らかにすることを目的とした。

方法は、宮崎県認定こども園協会の協力を得て、同協会加盟園の園長、3歳～5歳児のクラス担任を対象に、幼児期運動指針及び園での運動遊びの状況に関するWebアンケート調査を実施した。園長22名、クラス担任18名の回答を得た。

今回のアンケート調査により、「幼児期運動指針」については、園長は存在を知っているが、クラス担任などは存在を知らないことが多いことが明らかとなった。また、「幼児期運動指針」が提唱する「毎日合計60分以上体を動かす」という取り組みは、多くの園で実践できていると考えられる。子どもの体力や体の動きの獲得に関しては、不安を抱いている保育関係者が多いことが示された。

今後、さらに多くの回答や意見が必要であり、実施時期、実施方法を検討し直す必要がある。また、実際の子どもの体の動きを様々な機器を用いて可視化し、子どもの体力・運動能力の低下の根本的な問題について明らかにするとともに、教育・保育施設でできる体力・運動能力向上を図るための方策を考えていきたい。

キーワード：幼児期運動指針、運動遊び、運動実施状況、教育・保育施設

1. はじめに

子どもの体力・運動能力の低下が叫ばれて久しい。「スポーツ庁体力・運動能力調査」によると、1985年頃から続いていた体力低下は1998年頃に歯止めがかかり、以後の体力は総合的には向上しているが、1985年頃の最高値に回復した項目は少ないとし、依然として低い水準を保っているという報告がなされている。この傾向は、学童期だけではなく幼児期の運動能力にも見られる。科学技術の飛躍的な発展などにより、生活が豊かで便利になる一方、子どもにとっては、体を動かす機会が減少している。また、近年は新型コロナウイルスの影響により、屋外で体を動かす機会を失っており、今までゲームをしなかった子どもまでもがゲームをするようになるという現状が発生したことで、ゲーム依存

傾向の子どもが増加していることが問題視されている。二階堂(2021)は、約3割の小中高校生が「体力がなくなった」「疲れやすくなった」「気力がなくなった」「体重が増えた」「姿勢が悪くなった」「身体のどこかが痛くなった」など自粛後体調に変化があったと答えたと報告している。今後、子どもの運動能力の低下がさらに進むと考えられる。

子どもの運動能力を向上させるためには、幼児期に活動を通して様々な動きを獲得することが必須となる。文部科学省は、2012年に「運動習慣の基盤づくりを通して、幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動網力の基礎を培うとともに、様々な活動への意欲や社会性、創造性などを育むことを目指す」として、「幼児期運動指針」を策定し、全国すべての約35,000の保育所・幼稚園に通達した。しかし、2014年の群馬県総合教育センター幼児教育センターの報告によると、群馬県内の全ての保育施設の3歳以上児クラスの担任対象に「幼児期運動指針」についての質問紙調査を行い、75%の保育者が存在認知をしているが、25%の保育者は全く認知していないという結果が示された。また、存在認知をしている保育者の中で、内容認知までしている割合は28%にとどまる結果となり、「幼児期運動指針」を意識した保育を行っている園は3割程度であることが示された。平成27年には、文部科学省が「幼児期運動指針」をもとにした「幼児期の運動に関する指導参考資料〔ガイドブック〕」の第1集を作成、2016年に第2集をスポーツ庁が作成し、参考DVDとともに全国すべての保育施設に配布された。しかし、本研究が幼稚園免許更新講習でこのガイドブックと参考DVDを紹介した際、口頭で存在について受講者に尋ねたところ、「知っている」「見たことがある」と答えた受講者は、約70名中3名ほどであった。また、講義終了後の自由記述のアンケートには、ガイドブック、参考DVDが欲しいと記述している受講者が多数みられた。以上より、「幼児期運動指針」を意識した保育内容を行っている保育施設は少ないといえる。文部科学省は、「幼児期運動指針」の中で「幼児が楽しく体を動かして遊んでいる中で、多様な動きを身につけていくことができるように、様々な遊びが体験できるような手立ても必要」としている。そのためにも、保育者をはじめとした幼児に関わる人々の幼児期の運動に対する理解が重要となる。

2. 研究の目的

本研究では、幼児の運動能力向上を目指し、宮崎県の教育・保育施設における「幼児期運動指針」の認知度及び幼児の運動能力向上に対する取り組みの実態把握と意識について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

宮崎県認定こども園協会の協力を得て、同協会加盟園(107園)の園長、3歳~5歳児のクラス担任を対象に、令和4年3月18日~4月9日にかけて、幼児期運動指針及び園での運動遊びの状況に関するWebアンケート調査(Google Formを使用)を実施した。なお、アンケートは無記名で実施し、本研究への協力の同意はアンケートに回答することで得たものとした。本研究の実施については、宮崎国際大学教育学部の研究倫理審査委員会の承認を得て行った(承認日:令和4年3月16日)。

4. 結果と考察

アンケートは、園長22名、クラス担任18名の回答を得た。質問事項についての結果を下記に示す。

○「幼児期運動指針」の認知について（図 1）

文部科学省は、2012年に「幼児期運動指針」を策定し、全国約35,000の全ての教育・保育施設に通達した。幼児期運動指針の存在は91%の園長が知っていたが、内容まで把握している園長は、18%にとどまった。

クラス担任に関しては、6割以上が幼児期運動指針の存在を知らないという結果となり、実際に幼児と関わる保育者に浸透していないことが示唆された。

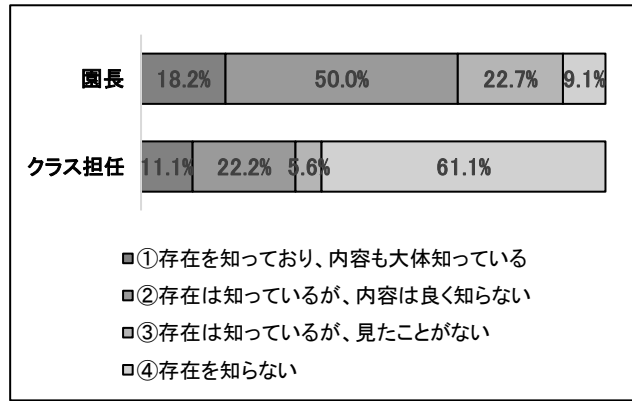


図 1 幼児期運動指針の認知度

○「幼児期運動指針促進用パンフレット」の認知について（図 2）

文部科学省は、「幼児期運動指針」を実効性のあるものにするために、全国の教育・保育施設にパンフレットを配布した。そのパンフレットを「見たことがある」と63%が回答したが、そのうち保育の参考にしていない園は18%にとどまった。また、クラス担任に関しては、幼児期運動指針そのものの存在を知らない者が多かったこともあり、内容を保育の参考にしていないと回答した者は約1割にとどまった。この結果からも「幼児期運動指針」の内容が浸透していないことがうかがえる。

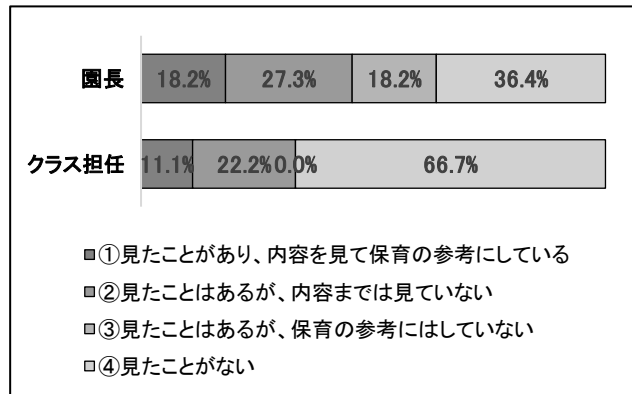


図 2 幼児期運動指針促進用パンフレットの認知度

○外遊びの実施状況（図 3）

外遊びの1日の実施時間は、1時間以上が園長で約95%、クラス担任で100%という結果となった。遊びの内容にも関係するが、「幼児期運動指針」が示している「毎日、合計60分以上、楽しく体を動かすこと」が、ほとんどの園で実践できているとされる。

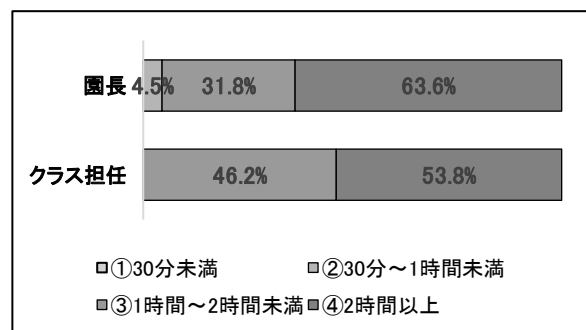


図 3 1日の外遊びの実施時間

○子どもの体力低下や動きの未獲得が感じられる場面があるか（図 4）

子どもの体力低下や動きの未獲得が感じられる場面が「多々ある」「少しある」と回答した者は、園長が55%、クラス担任が69%と両者とも半数以上であった。そのように感じた具体的な場面は、「体を支えることができない子どもがいる」「何もないところで転ぶ」「ケガが増えた」「口元のケガが多い」「すぐに感染症に罹るなど免疫力が低下している」などが挙げられた。また、その原因は何か、という質問には、「遊びや運動の経験不足」「ゲームの普及などによる室内遊びの増加」「公園などの固定遊具

の撤去が進んだため「保育者を含む子どもに関わる大人の遊びの経験不足」などが挙げられた。このことより、保育現場は子どもの体力低下に危機感を持っており、その一番の原因は「経験不足」だと考えていることが分かった。「大人の遊びの経験不足」という意見も挙がっていたが、これは保育現場においては、とても深刻な問題だと考える。保育者が遊びを知らないということは、子どもの経験に大きく影響を与え、子どもの遊びに制限をかけてしまうことになりかねない。保育者の経験不足についても取り組むべき課題だと考える。

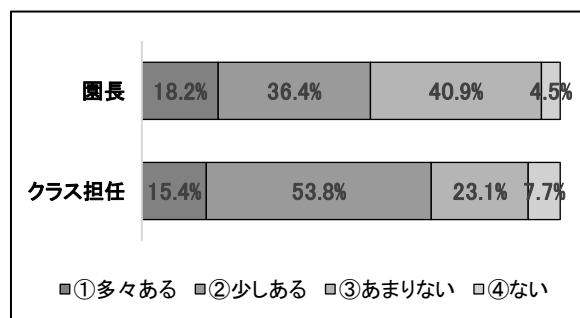


図4 体力低下や動きの未獲得が感じられる場面の有無

○毎日合計60分以上体を動かす具体的な取り組みについて (図5)

毎日合計60分以上体を動かす園に、具体的にどのような取り組みや実践をしているのか質問した。一番多かった取り組み・実践は、「外遊びや園庭遊びの奨励」であり、次いで「自由遊び」、「散歩」、「固定遊具・遊具」であった。現在多くの保育現場で取り入れられている「体操教室等外部講師招聘」は4割弱であり、普段の遊びを重視している傾向にあると考える。

○クラス担任が子どもと遊ぶ頻度について (図6)

クラス担任が子どもと遊ぶ頻度は、「毎日遊んでいる」「ほぼ毎日遊んでいる」と78%が回答しており、多くの保育者が日常的に子どもと遊んでいることが示された。遊びの内容としては、「鬼ごっこ」「リズム運動」「縄跳び」「ボール遊び」「ルールのあるゲーム遊び」などが具体的に挙げられた。集団で遊ぶ遊びに保育者が加わる機会が多い傾向にあると考える。

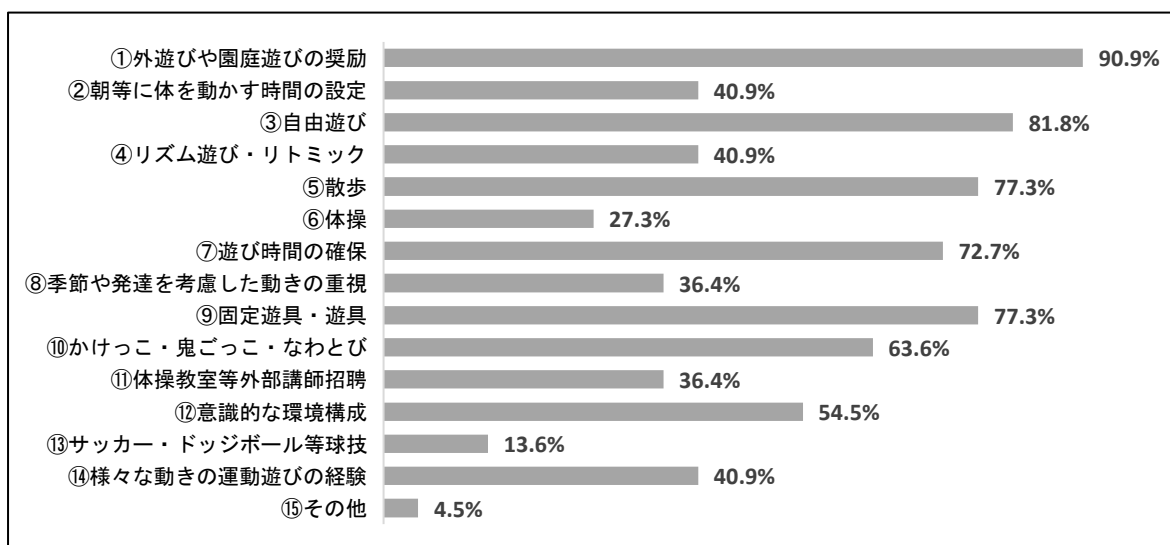


図5 毎日合計60分以上体を動かす具体的な取り組み

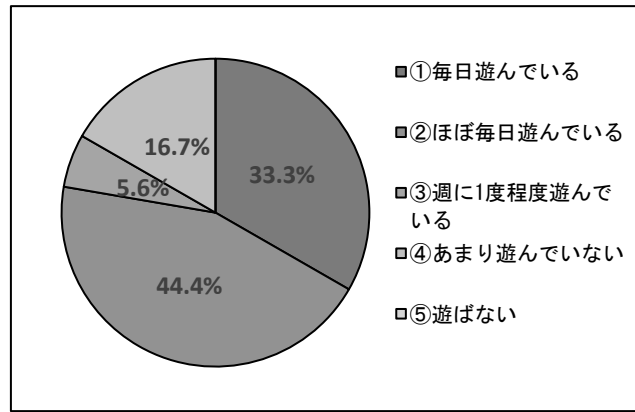


図 6 クラス担任が子どもと遊ぶ頻度

○クラス担任が感じる運動についての課題 (図 7)

クラス担任に、幼児が遊んでいる姿を見て課題として感じることは何か質問した。一番多かった意見が「いろいろな動きを経験していない」であり、次いで「体の操作が未熟な幼児が多い」「運動能力の低い幼児が多い」という意見が挙げられた。体の動きについて課題に感じている保育者が多くいることが示された。このことから、保育現場において、多くの動きを取り入れながら遊ぶ活動を取り入れることが重要であると考えられる。「体を動かすことを好まない幼児が多い」に関しては0%であり、保育現場においては、ほとんどの子どもが体を動かすことが好きであることが示された。

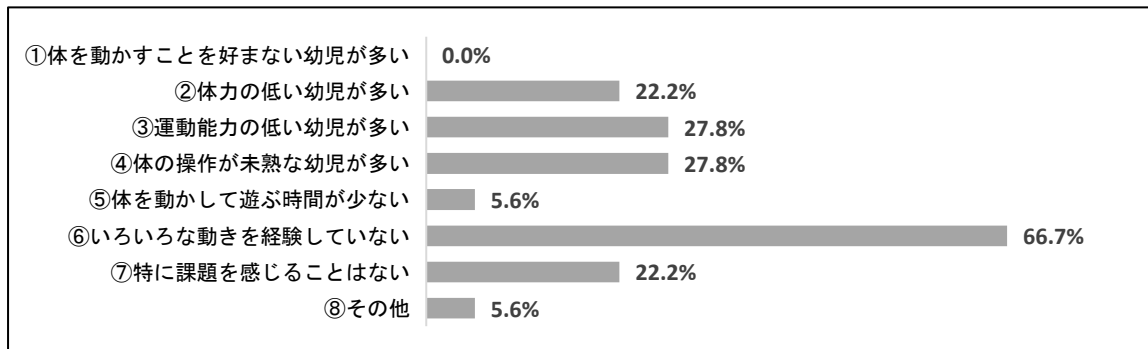


図 7 クラス担任が感じる運動についての課題

○クラス担任が運動遊びを実践する際に特に意識していることについて (図 8)

クラス担任が運動遊びを実践する際に特に意識していることについて質問した。一番多かった意見が「体を動かすことの楽しさを実感する」であり、次いで「ルール、決まりを守る重要性」「仲間との協力や競争」「健康・安全」であった。多くの保育者は、子どもたちが進んで体を動かしたくなるような工夫を考えているといえる。また、ルールや決まり、仲間との協力などを意識していることから、集団での遊びや取り組みを重視している傾向にあると考えられる。前述で課題として挙げられていた「多様な動きの経験」について、それを意識した実践をしている保育者は4割弱にとどまる結果となった。日々の遊びの中で多様な動きを入れる工夫を考える必要がある。

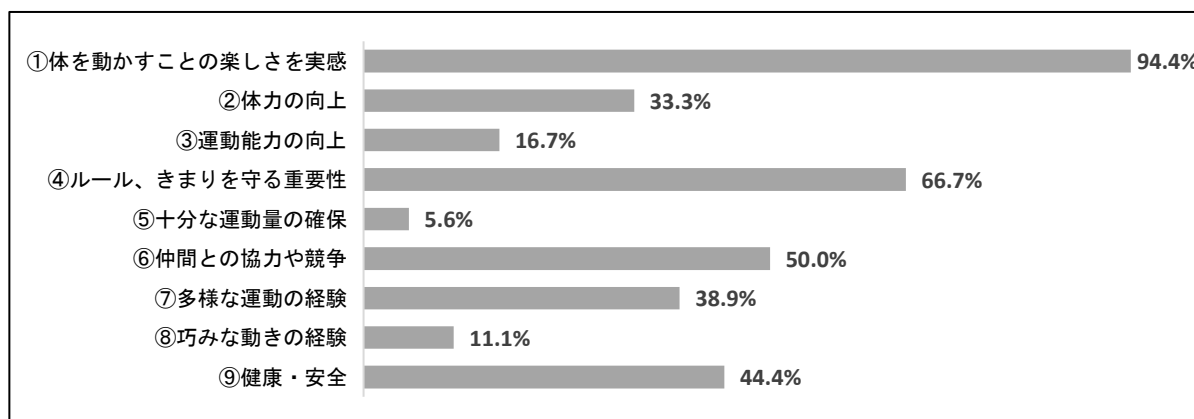


図 8 クラス担任が運動遊び実践において意識していること

○園で多様な動きができるように工夫している遊びや環境構成、援助等について（表 1）

園で取り入れている遊びの中で多様な動きができる工夫や環境構成、援助等についての質問に、自由記述で下記の回答を得た。

表 1 園で多様な動きができるような工夫・援助等

- ・移動可能な鉄棒を使って、年齢や活動内容に合わせて配置を工夫する
- ・園全体を使ってサーキット遊びなど保育者の指示を聞きながら障害物を避けたり、様々な体の部位を使って動いたりできるような工夫
- ・園庭にタイヤやいろいろな大きさの台、ケーブルドラムなどを配置している
- ・十分に遊べる時間を提供する
- ・散歩で土手を上がったたり下りたり、川で石投げをしたりしている
- ・リトミック遊びを取り入れている
- ・できるだけ戸外へ行って散歩や運動をして体力をつけられるようにしたり、ゲーム式の遊びを取り入れて楽しみながら体を動かせるようにしたりしている
- ・トランポリンを取り入れている
- ・足を使う遊びを多く取り入れている（けんけんぱ、ジャンプなど）
- ・複合型の固定遊具（ボルダリング、すべり台、トンネル、網くぐり、登り棒等）を設置している
- ・自由遊びの時間に、ボール、竹馬や縄跳び、フープ、平均台、三輪車など、子どもが自分で選んで遊べるよう、用具を揃えて整えている
- ・園児も職員もグラウンドを歩いて足腰を鍛える「歩こうタイム」を実施している
- ・常に運動ができる環境整備とカリキュラム作成に取り組んでいる
- ・環境構成、年齢や発達段階に応じた遊具を設置することを意識しており、遊具は保護者と連携して共同で作っている
- ・安全を意識しての遊び方について定期的に確認し、共有している
- ・室内では、一年中、子ども達は裸足で過ごしている

- ・子どもの主体性を重視し、必要最低限の声掛けをしながら見守っている
- ・朝のお集まりで毎日かけっこをしている
- ・体育の専門及び外部講師による指導で、体育器具や鉄棒などの固定遊具を用いる取り組みをしている
- ・四季を通して歩いて山に出かけ、開放感に満ちた活動をしたり、園庭や菜園で幼児の好奇心をかき立てるような活動を考えたりしている

子どもの自主的、主体的な活動を促すために、環境構成や環境整備を重視した回答が多く見られた。子ども発達、年齢を考慮し、いかにして好奇心を引き出すか考えながら環境整備を行っていることがうかがい知れた。また、「多様な動きを取り入れた運動遊びを経験するために必要なことは何か」という問いについても、一番多い回答が「環境構成、環境づくり」であった。次に「身体的活動を意識したカリキュラムや計画の作成」であった。このことから、子どもが多様な動きを経験することができる環境や計画が必要であることが明らかとなった。

○幼児の運動能力テストに関する意識について（図9）

クラス担任に対して、担任クラスの幼児の運動能力を測ってみたいか質問したところ、「とても思う」が28%、「少し思う」が33%回答しており、6割以上のクラス担任が運動能力テストに興味・関心があることが分かった。その理由として、「どのくらい運動能力が身についているか知りたい」「計測して個々の得手不得手を知りたい」「保護者にも周知して家庭での生活の仕方も意識してもらいたい」「運動能力が分かれば対策を立てやすくなる」などが挙げられた。多くの保育者が幼児

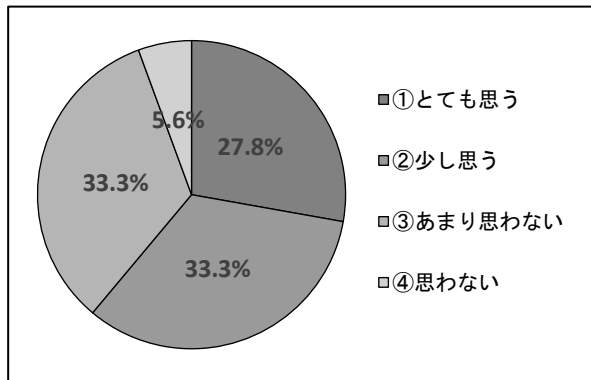


図9 幼児の運動能力テスト実施への意欲

の運動能力を知ること、保育の見直しや体力向上の対策に役立てたいと考えていることが明らかとなった。幼児の運動能力テストに関しては、「幼児期運動指針」にも掲載されているが、園長の認知においても50%未満であったため、実施しているところは少なかった。しかし、この運動能力テストを定期的に継続して実施することで、保育現場や家庭にも意識づけることができ、幼児の運動能力の向上に繋がるのではないかと考える。

5. まとめ

今回のアンケート調査により明らかとなった事柄を下記のようにまとめる。

- ・「幼児期運動指針」については、園長は存在を知っているが、クラス担任などは存在を知らないことが多い
- ・「幼児期運動指針」が提唱する「毎日合計60分以上体を動かす」取り組みは、多くの園で実施できている
- ・子どもの体力低下や体の動きの未獲得に不安を抱いている保育関係者は多い

保育現場における「幼児期運動指針」の認知度と運動実施状況の実際

- ・子どもの体の動きの未獲得は、経験不足が原因だと考えている保育者が多い
- ・保育者の遊びの経験不足も子どもに影響があると考えている保育関係者がいる
- ・子どもの運動能力向上や多様な体の動きの獲得に向けて、環境整備や環境づくりに力をいれている園が多い
- ・子どもの運動能力向上を図るためには、カリキュラムや計画が必要である
- ・多くの保育者が幼児の運動能力テストに興味・関心があり、運動能力の程度を知ること、今後の保育に生かしたいと考えている

今回、アンケート調査を行ったことで、回答数は多くはなかったものの、「幼児期運動指針」の存在を保育現場に知らせるきっかけとなったのではないかと考える。実際に、「幼児期運動指針」のガイドブックを取り寄せた園もあったと報告を受けた。また、保育現場での運動状況や運動に対する課題も知ることができた。幼児の運動能力を向上させるためには、保育現場での取り組みが重要であり、保護者との連携も不可欠であると考え。運動能力テストなどを利用し、子どもの運動能力を把握しながら、活動計画等を立てていくことが効果的であると思われる。

今後、さらに多くの回答や意見が必要であり、実施時期、実施方法を検討し直す必要がある。また、実際の子どもの体の動きを様々な機器を用いて可視化し、子どもの体力・運動能力の低下の根本的な問題について明らかにするとともに、教育・保育施設でできる体力・運動能力向上を図るための方策を考えていきたい。

引用および参考文献

- 群馬県総合教育センター幼児教育センター（2015）.「幼児期における運動遊びに関する調査」,
<https://center.gsn.ed.jp/wysiwyg/file/download/1/3775>,（2022年8月31日取得）
- 二階堂元重・新井貞男・藤野圭司・林承弘（2021）.「コロナ自粛後の身体変化に関するアンケート調査結果：コロナロコモとコロナストレス」,『運動器リハビリテーション = The journal of musculoskeletal medicine: 日本運動器科学会誌 / 日本運動器科学会 編』第35巻, pp.246-255.
- 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮（2011）.「幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入」,『平成20-22年度文部省科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書』
- 文部科学省（2012）.「幼児期運動指針ガイドブック」,
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm,（2022年8月31日取得）

謝辞

この研究を進めるに当たり、アンケート調査にご協力いただきました宮崎県認定こども園協会及び加盟園に心より感謝申し上げます。